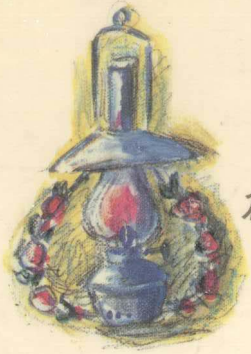

倉本聰
コレクション
16

坂部ぎんさんを探して下さ

倉本聰

scénario
1966-80

理論社

倉本聰
コレクション
16

坂部ぎんさんを探して下さい

scénario
1966-80

倉本聰

KURAMOTO SOH COLLECTION 16

坂部ぎんさんを探して下さい

1984年3月　第1刷

著　者／倉本聰(くらもとそう)©

発　行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町15-6

電話 (03)203-5791

振替 東京9-95736

1984 Printed in Japan／0393-91616-8924

誠和印刷／島田製本

倉本聰作品

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

坂部ぎんさんを探して下さい

坂部ぎんさんを探して下さい　もくじ

円型ベッド物語　7
舷燈　41
おりょう　97
平戸にて　127
父ちゃん　161

ぜんまい仕掛けの柱時計　191
祇園花見小路　231
坂部ぎんさんを探して下さい　261
年の始めの　297
機の音　335

装画・題字　小野州一
装幀　杉浦範茂

円型ベッド物語

日本テレビ　制作
昭和41年12月31日放送

住宅設計図（完成予想図）

一間きりだが、八坪ほどのフレンチスタイルの美しい室内。

静かに流れるクールなジャズ。

画面遠くから男女の声。

女の声「できたのね。とうとう！」

男の声「五年越しの夢だからな」

女の声「私たちのお城！」

男の声「ああ、明日いよいよ金融金庫へ行く！」

女の声「ＯＫ出るかしら!?」

男の声「出るさ！　建物そのものは全然かからないんだ」

女の声「家具を入れるのが大変だわ」

男の声「おいおい入れるさ。最初はまず家だ」

女の声「金庫の人が親切だといいけど」

男の声「大丈夫だよ、洋ちゃん」

別の女の声「お待たせいたしました」

設計図がとり除かれ、テーブルの上にコーヒーが置かれる。そこは――

小さな喫茶店

男、神野司郎（二十七歳）。心にわき上がる興奮をおさえて、砂糖壺からサジをとる。

司郎「二ハイ？」

洋子（うなずく）

女、日泉洋子（二十四歳）。ボンヤリ壁のポスターを見ている。

ポスター――映画の広告である。

豪華な円型ベッドに微笑している、ネグリジェ姿のグラマー女優。

「ベッドで、昨夜――」そしてその下のタイアップ広告。

「〝ベッドで昨夜――〟のベッドを当てよう、映画をご覧あなたに、この超デラックス円型ベッドを贈る！」

司郎の声がダブる。

司郎の声「最初は何もなくたっていい。ただ家だけがあればいい。一緒になったらどんどん稼いで、少しずつ城を完成していく。まず白いカーテン、それから小さなホームセット、それから」

洋子「ねえ」

司郎「え？」

洋子「――あの広告」

司郎「何――ああ、あれか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

洋子「どんな人に当たるのかしら、あんな素敵な円型ベッド」
司郎「さあね。いずれにしろ俺たちには縁はないよ」
洋子「あんな豪華なベッドで寝られたら」
司郎「バカだな洋ちゃん。（笑う）ああいうの貰うのはどっかの金持さ、コネがあるんだ、ああいう抽選には」
洋子「――」
司郎「コーヒーさめるよ」
洋子、コーヒーをかき廻す、ふと顔を上げ、またポスターを見る。
洋子「（ポツリ）何してるかしら、あれ貰う人、今――」
音楽。
ポスター。その画面が突然中央から割れて、

机の上に数個の十円玉

田中一郎（四十五歳）のアパート。六畳一間のアパートの机で、一郎、虫眼鏡で十円玉を観察している。
一郎「本当だ！山中のいうとおり！　オイ！ユミ！来てみなさい！　早く」
妻ユミ（三十五歳）、家計簿を手にオズオズと近づく。
ユミ「アノ、昨日の家計簿――」
一郎「ウム、見てみろ！こりゃすごい発見だ!!　十円玉にオスとメスがあるンだ！ホラ、ナッ。いいか、神社の屋根に鶏がいるだろッ。向合って二羽！なッ。それは雄だ！　ホラ尾っぽが垂れてる！　ナッ。ところがコッチ、ホラ、尾っぽがないだろ、キュッと上がってる！メスだこれ！メス!!――すごいですよあなたこれは！山中のいうには、昭和二十六年の十円玉と二十七年の一部がメスだってンだ！　めずらしいンだそうだ！――恐らくこのメスは銅の含有量が多いンだ。その目印に――オイ、ユミッ」
ユミ「はい」
一郎「これからは十円玉はいちいち調べて、メスは絶対に出しちゃいかん！」
ユミ「はい」
一郎「今に値が上がる、こりゃ間違いない！　どけ！」
一郎ふたたび十円玉を観察。
ユミ「アノ――家計簿――いいですね」
一郎「見せなさい！」
ユミ、緊張して家計簿を出す。
一郎、見る。
一郎「――何だこりゃ――ミカン四十三円！　お前また果

物屋で買ったンだろう！」
ユミ「（小さくなる）スミマセン」
一郎「八百屋のほうが安いってこと、何度いったらわかるんだ！　――オヤ、今チャラって音がしたな」
ユミ「（赤くなる）しません！」
一郎「いや！した！　チャラって音がした！」
ユミ、後ずさる。一郎、不意に手をのばし、ユミの割烹着のポケットに手をつっ込む。ユミ赤くなる。
ポケットから出てくるパチンコの玉――うなだれるユミ。
一郎、じっと見る。
ユミ「拾ったンです一つ！　それでやったらジャラジャラッと出ちゃって――」
一郎「――」
ユミ「もうやりません」
一郎「たとえば三十円やったとする。その三個の十円玉の一つがたまたまメスであったとする。お前は三十何円かを、無駄な浪費に費したことになる」
ユミ（しおれている）
一郎「お茶をいれなさい。出がらしでいい！」
ユミ「ハイ」
ユミ、部屋の隅に退く。
熱いヤカンをとるためにハンカチをとり出す。
そのはずみにポケットから映画の入場券の半ペラが出る――「ベッドで昨夜」
ユミ、ドキンとする。
十円玉を見ていた一郎、キロッと目を光らし、ユミを見る。
ユミ仰天し、とっさに入場券を口へ放り込む、必死な顔つきでゴクンとのみこんだ。
タイトル流れて。

アパート（朝）
一郎、出勤の仕度で靴をはく。かいがいしく手伝うユミ。一郎出かけようとすると、
ユミ「あの――今日の分」
一郎、ポケットから十円玉を五個出し、渡しかける。
――ふと気がついて百円玉にかえる。
一郎「お釣り」
ユミ「ハイ」
急いでポケットから十円玉で五個出し、渡す。
一郎、それを一つずつたんねんに調べながら出かけて

行く。
ユミ「行ってらっしゃい」
戸を閉める。
隣室との境の壁をトントンたたき、部屋の中央へ。隣室から、急に大きくなるラジオの歌謡曲。
ユミ、解放されたように鼻唄をうたい、そこらをトントンと片づけはじめる。
ふと、戸棚から小さな宝石箱を出し、開く。中にピカピカのパチンコ玉がいっぱい。
ユミの顔色が明るく輝く。ポケットからパチンコ玉を出し、いかにもうれしそうに一粒一粒磨いて入れる。
壁が向うからトントンとたたかれる。
玉を磨きつつ合図を返すユミ。
陽気な歌謡曲、無心なユミ。
戸が開き、隣りの奥さん（京子）、勝手知ったるふうに入ってくる。
京子「ねえ、見てよ、これ！」
ユミ「アラ、ネグリジェ」
京子「買わしたのよ亭主に、派手かしら」
ユミ「いいじゃない！　きれい！」
京子「少しさ、挑発しなくちゃと思ってさ」
ユミ「フフ（磨く）」
京子「あい変らずだねえ。パチンコの玉が宝石代わりか。
——子どもでもおつくりよ。アラ、ゴメンネ、またいった」
ユミ「いいのよ。うちの人、きらいなンだもン」
京子「見るかい？　テレビ、始まるよ、昨日のつづき」
ユミ「そうだ！見なくちゃ」
急いで立ちあがり、そこらを片づける。
京子、ユミの額をちょっとつついて、
京子「ヤダヨまた泣いちゃ。フフッ、テレビドラマで泣くンだからかわいいよ」
ユミ、懸命にそこらを片づけている。

東京住宅金融金庫
近代的なそのビル。

同・窓口
順番を待つ人たちの中に、神野司郎と日泉洋子。
声「神野司郎さあん！　神野司郎さあん！」
二人、緊張してやっと立ちあがる。
声「三番受付を中へどうぞ！」

二人、三番窓口からカウンターの中へ――。

同・査察課

デスクに坐っている査察課長田中一郎。一郎、十円玉をあい変らず調べている。それを脇へおくと、廻ってきた設計図に目を移す。例の司郎たちの設計図。

声「こちらへどうぞ」

司郎の声「よろしくお願いします」

司郎と洋子前へ坐る。一郎、顔も上げずに、設計図と見積りを見ている。

緊張している若い二人。

長い間。

一郎「(顔も上げず)これは、何?」

司郎「は?」

一郎「この部屋」

司郎「は、あの――すべてです」

一郎「すべて?」

司郎「は。アノ、(愛想よくしようとつとめながら)居間兼、食堂兼、寝室、すべて」

一郎「なるほど。イカシテル、というやつ。ヒッヒッ」

司郎と洋子、顔を見合わせる。必死に、

司郎「イエアノ、あくまで実用本位にですネ」

一郎「フレンチスタイル」

司郎「ハ?」

一郎「なかなか豪勢なもンだ」

司郎「い、いやしかし、建築費は」

一郎「金庫というところはあなた、貧しい庶民に金を貸すところでね」

司郎「モモ、もちろんです! 僕たち二人とも金がないンです! 婚約してから五年になります!」

一郎「ムキになンなさんな」

二人「――ハア」

一郎「ヒッヒ」

一郎、初めて顔上げ、二人の顔を見て、煙草に火をつける。

一郎「若いね、あんたたち」

二人「――」

一郎「家ってものは、本来人間のお城でね――織田信長以来誰しも凝りたがる。とくに若い者は――」

司郎「いや僕らは――」

一郎「まあききなさい――ところがここに現代人の誤解がある。信長は一日じゅう城の中にいた。だが今の者は

城にはおらん。帰ってくるのは夜だけだ。住宅はいわばねぐらにすぎなくなる」
司郎「――」
一郎「夜露をしのぎ、寒さを防ぐ布団があればそれで本来ねぐらは用をなす」
司郎「しかし――」
一郎「それはま、極端だが、本来うちの金庫はそういう人たちのためにあるンでね」
洋子「――じゃあ、じゃあ課長さんは、この設計図じゃ許可が下りないと！」
一郎「そうはいいません」
洋子「でも」
一郎「ただ君たちの齢ではいささかぜいたく」
司郎「（叫ぶ）何がぜいたくですッ」
びっくりしてふり向く周囲の人たち。
一郎「（平然）ぜいたくです」
司郎「冗談じゃないッ。高いアパート代を払うよりも、同じその金で家を建てるほうがよっぽど経済的だと思いませんか!?」
一郎「そんなことはない！」
司郎「どうして――」
一郎「アパートは高いと限らない」
司郎「最低一万は月々とられる」
一郎（首をふる）
司郎「ご存じないンだ！」
洋子「じゃあ、じゃあ課長さんはどんな家にいらっしゃいます」
一郎「アパートだよ」
洋子「幾間の――」
一郎「六畳一間」
洋子「一間!?」
司郎「独身なンですか？」
一郎「いいや、女房がいる」
洋子「お子さんは」
一郎「そういうムダなものはつくりません」
二人「――!!」
一郎「家賃は六千円、ただそれだけだネ。ヒッヒッ」
二人、顔を見合わせる。
部長が入ってきて、
部長「田中君」
一郎「（とび上がる）ハッ」
部長「あのね、これ――見といて」
書類を渡して去って行く。

一郎「ごくろうさまです！」
いなくなると途端にまたゴウマンになる。
一郎「あなた方には倹約ということが、どうもやっぱりわかっておられない」
二人「――」
一郎「たとえばここに十円玉が二つある。いいですか。あなたなら二つのうちどっちを取ります」
二人――疑わし気に十円玉を手に取る。
じっと見ている一郎。
電話のベル鳴って、部下がとる。
部下「あの――課長、お宅から」
一郎「(とる) 馬鹿者！仕事中に電話しちゃいかんとあれほどいったのがわからんか!!」
びっくりして見る若い二人。

アパート・電話口（赤電話）
同宿人たちが群れている中で、必死に電話をかけているユミ。
ユミ「すみません！ でもあの運送屋さんがですねえ――ハ？――ハ？――いえ、あの――事務所の電話じゃなくって、廊下にあるほうの赤電話」

金庫・査察課
一郎「(叫ぶ) 馬鹿者!!何度いったらわかるンだッ。赤電話でかけたら十円かかるッ。管理人の部屋でかけたら七円ですむンだッ。どうしてちょっとの労力をケチル!! 昼休みにこっちからかけ直す。阿呆ッ、こっちの電話はタダですむッ」
ガチャンと切る。
一郎、平然と若い二人に向う。
一郎「ヒッヒッ。どっちを取るか、決まりましたかな？――ヒッヒッ」
司郎「ハ、ハア――アノ――(洋子に) どっち？」
洋子「サア――」
すっかり食われている若い二人。

アパート（一郎の部屋）
ユミ、必死の顔つきで走りこんでくる。アッと悲鳴。
窓から今しも数人の運送屋が、巨大な物体を押しこもうとしている。
ユミ「コ、困ります!! 主人が！――叱られます私！」
部屋の入口からのぞいている同宿の夫人京子、管理人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.